

築100年の養蚕農家で 老衰からがん末期までの 終末期を支える

ミニホスピス「和が家」は、訪ねてみると古風な造りの民家だった。築100年、延べ床総面積102坪(約340㎡)、手入れの行き届いた広い庭に瓦屋根の木造二階建て。昔ながらの姿を保った旧農家が、究極の終の棲家に生まれ変わっていた。

日本人が老いて死ぬ場所は、かつて自宅がほとんどだったが、70年代に逆転し、現在は8割近くが病院で死ぬ。近頃はそれに加え、介護施設

古きよき日本を支えた往年の養蚕農家が、終末期の心と体を癒す、懐かしいわが家として甦った。在宅ホスピスの草分けが、「医療より暮らし」を目指してつくった終の棲家を訪ねた。

最期は、

わが家のよう

自然に逝きたい……

ミニホスピス

『和が家』の癒しの力

取材文●吉原清児／写真●森清／編集●見田葉子

で亡くなるケースも増加し、新たな看取りの場となりつつある。一方で介護施設は、利用者にとって生活の場だ。病院死より、最期まで住み慣れた家で死にたいとお年寄りの願いを叶えようと、終末期医療に対応する施設が少しずつ増えてきた。

老衰でも認知症でもがん末期でも安心して利用でき、自宅でも「わが家」のように、穏やかな心で暮らし、ロケットの灯が燃え尽きるかのごとく逝く。そうした「家」があるのなら、それは住人にとって、理想の終の棲家であるはずだ。

前橋市石倉町。明治から昭和初期まで、この辺りは製糸業で栄えた町であった。代々続く養蚕農家が桑を栽培して、独特の家屋構造の中で蚕を飼った。戦後になって都市化がすすみ、製糸業の衰退とも相俟って、養蚕農家は朽ち果てた。古きよき日本の消滅を象徴するかのよう、次々に取り壊されたのである。旧養蚕農家を改造した「和が家」の周辺も現在は、東隣がシティホテル、西隣は一目でそれとわかるラブホテルである。「和が家」は、その間にはさまってどっしりと建っていた。

そこには、お年寄りの安心と微笑みがあり、寄り添うハートが存在する。それを可能にしたのは、スタッフたちのぬくもりともう一つ、「家自体が癒しの力を持つ」という独創的な発想なのである。

予定表通りの

介護ではなく、
すべてが利用者優先

カラカラと音の鳴る玄関戸を開けると、花柄の薄いカーテンの向こうから「はあ、い」と女性の明るい声が出た。生方ちはるさん(68歳)は介護ヘルパー歴6年。兼業主婦とし

て2男1女を育て終え、3年前にこの施設管理者になったという生方さんが、「和が家」を案内してくれた。

1階、置き畳7帖の居間とダイニングキッチンがゆつたりと日当たりのよいバリアフリーの空間で、約50㎡。奥の6帖間、神棚を祀った和室に一人横になっている老女がKさん。1909年生まれ。

Kさんは、以前は息子一家と三世代同居して仲良く暮らしていたが、日中独居だった。ある日トイレで転び大腰骨骨折。要介護と認定された時点で、留守中に何かあったら困る家では看られないと家族が困り果て、98歳の時、「和が家」の住人となり、3年半が過ぎたという。

先月101歳になった最高齢Kさんに、あえて病名をつけければ老衰だ。食も細くなって一日2食。起きて食欲があれば、食べる。生方さんがいう。

「Kさんに決まった食事時間はないです。今年は夏の暑さで体力が弱った感じなので、目覚めてお腹が空いた時が勝負です。ご飯をお茶碗に半分食べられたらおんの字。ここでは、予定表通りの介護ではなく、すべて利用者さん優先なんです」

その日午後遅くに元気が出たKさんを、ヘルパーが2人掛かりで座イスに座らせた。Kさんはアイスクリームを一口、二口美味しそうに口